

特別支援学校授業力向上実践事例集



平成 31 年 3 月
千葉県教育委員会
千葉県特別支援学校キャリア教育推進協議会

目次

はじめに

1. 千葉県で実施している技能検定の概要

- ・清掃検定について
- ・パソコン入力検定について

2. 清掃検定の取組に関連した授業実践

- ①地域と共に歩む出張清掃の取組
(千葉県立我孫子特別支援学校清新分校)
- ②仲間との対話から自己の課題に気付き、自ら改善していくことで清掃技術を
高めていく取組 (千葉県立特別支援学校市川大野高等学園)
- ③生徒の自主性と考える力を育成する模擬会社設立の取組
(千葉県立市原特別支援学校つまい風の丘分校)
- ④基礎基本技能の習得と身に付けた技能を校外清掃に生かすことで自信や成就感を
高める取組 (千葉市立高等特別支援学校)

3. パソコン入力検定の取組に関連した授業実践

- ①身近な素材を題材にして情報活用能力の育成を目指す教科「情報」の取組
(千葉県立特別支援学校市川大野高等学園)
- ②パソコン入力検定を通してパソコンへの興味とチャレンジ意欲を育てるスキルアップ
型の授業の取組 (千葉県立袖ヶ浦特別支援学校)
- ③スキルアップを図ることで余暇活動だけではなくパソコンとの関りを広げていく部活
動「パソコン部」の取組 (千葉県立八千代特別支援学校)
- ④生徒同士で協働する活動をとおして一人一人の学習意欲を高めながらキャリア発達を
促す取組 (千葉県立夷隅特別支援学校)

はじめに

千葉県では、特別支援学校における一貫した系統的・体系的キャリア教育の推進について協議し、本県特別支援教育の振興に寄与することを目的として、平成27年5月に「キャリア教育推進協議会」を立ち上げ、4年目を迎えます。清掃検定の取組は、本会発足前から始めており、県検定は今年度で第6回目の開催、パソコン検定も今年度で3回目の開催となりました。

千葉県が大切にしていることは、検定のための検定ではなく、清掃検定は「お掃除好きの子どもを育てる」こと、パソコン入力検定は「パソコン好きの子どもを育てる」ことです。現在では、清掃検定だけではなく、パソコン入力検定、接客サービス検定（試行）を含めた3つの技能検定を実施しています。各技能検定を通して、幼児児童生徒の主体的な学びを推進するとともに、自己肯定感を育み、自己実現のツールとなってほしいという願いを大切にしております。

今年度、県内の特別支援学校で実践されているキャリア教育の実践を、「特別支援学校授業力向上実践事例集」としてまとめることができました。多くの皆様に御高覧いただき、忌憚のない御意見、御感想をお寄せいただけると幸いです。

終わりに、本実践事例集の発行に当たり、御尽力いただきました千葉県教育委員会教育振興部特別支援教育課指導主事松見和樹様をはじめ、実践をお寄せいただきました各特別支援学校関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成31年3月

千葉県特別支援学校キャリア教育推進協議会 会長

(千葉県立特別支援学校市川大野高等学園 校長) 田中 均宜

千葉県特別支援学校清掃検定について

1 目的

- (1) 日々の清掃や校内検定に取り組む幼児児童生徒の意欲の向上に資する。
- (2) 校内清掃検定で1級を取得した幼児児童生徒を対象に県清掃検定審査員が審査し、優れた成績を収めた者を主催者から表彰する。

2 検定種目及び課題

- (1) 床清掃（自在ぼうき使用）
- (2) 窓清掃（スクイジー使用）
 - ・検定の制限時間は、床清掃6分、窓清掃8分とする。
 - ・検査で使用する道具等は、『千葉県特別支援学校清掃検定マニュアル第2版』および「千葉県特別支援学校 県清掃検定細目」に準じて、主催者が用意する。

3 検定方法

「千葉県特別支援学校県清掃検定細目」に準じて実施し、『千葉県特別支援学校清掃検定マニュアル第2版』12～14ページの校内検定評価表、県清掃検定評価表（案）に基づいて県清掃検定審査員が評価・助言を行い、表彰する。

4 受検者及び受検種目

- (1) 千葉県内特別支援学校の幼稚部、小学部、中学部及び高等部（本科）に在籍する幼児児童生徒のうち、校内清掃検定で各検定種目の1級を取得し、当該校長が推薦する者。
- (2) 1校あたり各種目3名以内、受検種目は一人一種目のみとする。

5 清掃検定の様子



開会式



床清掃 1



床清掃 2



窓清掃 1



窓清掃 2



閉会式

千葉県特別支援学校パソコン入力検定について

1 目的

- (1) 県内統一の基準に基づくパソコン入力に関する技能検定とおして、主体的学びを推進するとともに、パソコン好きな児童生徒の育成を図る。
- (2) 検定級は、1級から10級までを設定し、検定基準に合格した者に対して認定証を授与する。

2 検定内容及び検定級

- (1) 日本語ワープロソフト及び表計算ソフトを使用して、基準に則ってパソコン入力技能を検定する。
- (2) 検定級は1級から10級とする（主催者が定める検定問題基準による）。
- (3) 3級から10級は、速度部門（10分間で文字を正しく入力する技能）を実施する。
- (4) 1級と2級は、速度部門と文書作成部門（20分間で、定められた様式に沿って文字入力し、正しく文書を作成する技能）を実施する。1級と2級は、速度部門と文書作成部門の両部門ができて合格とする。

3 検定対象者

- ・千葉県内特別支援学校に通う児童生徒

4 検定実施方法

- (1) 「千葉県特別支援学校パソコン入力検定実施要項」及び「パソコン入力検定実施細目」に準じて実施する。
- (2) 検定問題は主催者が作成する。級に応じて入力する文字種、漢字レベル、合格するための文字数を定める。
- (3) 1級から6級は、問題用紙に記された課題を見て、日本語ワープロソフトを使用し、入力する。7級から10級は表計算ソフトを使用し、パソコン画面を見て入力する。
- (4) 検定実施にあたっては、「パソコン入力検定 監督者要領」に沿って行う。
- (5) 合格者に認定証を授与する



<検定の様子>

地域と共に歩む出張清掃の取組

【学校名：千葉県立我孫子特別支援学校清新分校】

～取組のポイント～

コース実習の授業で清掃の知識や技術を学んだ高等部生徒が、近隣の中学校へ出向き、中学生と一緒に清掃活動を行いながら床清掃や窓清掃の方法を教えた。教える立場として活動し、その体験を基に振り返ることで自己の気づきを促し、主体的な学びへとつなげた。

1. 実践の概要

(1) 対象生徒

特別支援学校高等部普通科職業コース（高等部1年～3年）

(2) 各教科等を合わせた指導

職業コース実習（メンテナンスサービスコース）

(3) 目標

- ①主体的・対話的で深い学びとしての清掃活動として近隣の中学生に対して清掃の技術を伝えるとともに、学校内で学んだ技術や理論を再確認する。
- ②地域の学校との連携を重視し、共に学び合う場をつくる。

(4) 学習計画

平成29年9月27日～平成30年2月19日（全15回）

2. 実践の内容

(1) 取組までの経緯

本校は、教育課程の中心にコース実習を位置付けている。その一つ、メンテナンスサービスコースは、清掃活動を通して働く力を身に付けることを目的の一つとしており、地域の小、中学校や近隣の施設に出向いた出張清掃を行っている。昨年、近隣の中学校に出張清掃に行った際、特別支援学級の生徒が清掃の活動場面を見学することがあり、手際よく仕事を行う生徒の姿やプロの清掃用具を使って窓や清掃を行う生徒の姿を見て、「こんな高校生になりたい」「高校生に清掃を教わりたい」という中学生の声が挙がった。このことをきっかけに、中学校（特別支援学級）の生徒と共に清掃を行う取組が始まった。

(2) 内容

月に一回、本校の生徒が2名ずつ、中学校（特別支援学級）へ出向き、清掃（窓、床）の手順や方法を教えながら一緒に活動している。中学生と高校生が「共に活動する」ことにあたり、初回は相互理解を基本とし、お互いの自己紹介や本校の取組について話をした。また、働く上では技術だけではなく、「挨拶」「返事」「身だしなみ」という基本的なことも必要であることを伝えた。

3. 工夫点

(1) 事前・事後学習

相手に伝える立場として、自分達の清掃技術の再確認、そして伝達の方法について、事前に確認し合う時間をつくった。「なぜ」「どうして」という視点を持ちながら自分の技術を再確認することで、中学生にも分かりやすく説明できるように準備を進めた。また、実習後、振り返りの時間を設定し、技術面だけではなく、中学生との関わり方や清掃の教え方、言葉の伝え方等について生徒同士で振り返ることで、次時の出張清掃での中学生との関わりに改善が見られ、

より主体的に活動に取り組むことができるようになった。

(2) 教員同士の連携（共通理解）

実習の流れの確認だけでなく、両者の立場からの実習の必要性、意義等について十分に理解し合い、両者にどのような教育的効果があるのか、目標と評価を明らかにして、両者の成長につながるための話し合いを重ねた。

4. 実践の評価（成果と課題）

(1) 成果

当初は、中学生との関わりや、教えることへの不安を抱える生徒もいたが、実際に中学生と関わる場面になると、自然と会話が溢れ、先輩として手本となる行動を示し、中学生の目線に合わせて話をしたり、相手に合わせて教え方を工夫したりと、学校では普段なかなか見られない生徒の様子が自然と出ていた。また、普段は教わる立場が多いことから、どのように教えれば良いのか戸惑う生徒もいたが、中学生から頼られることで、他者から求められている自分に気づき、必要な存在としての自覚がもてるようになり、これまで自分が学んできたことについて自信をもって教える姿が見られるようになった。

「伝える側」に立ち、異年齢の人との関わりや対話を通して相手を気遣い、思いやるなど、常に相手のことを考えながら行動できるようになってきたことは、他の出張清掃先や学校生活へもつながった。



【窓清掃の様子】

この取組は二年目であるが、活動を重ねていくにあたり、生徒一人一人の様子に変化が見られた。普段「学ぶ側」である生徒が、清掃を「伝える側」に回ることにより、他者から必要とされ、感謝を受けることで自信が高まり、「次回は〇〇を教えたい」「〇〇すればよいのでは」といった生徒達からの声が積極的に挙がるようになってきた。これは、生徒達自らが学びの場をデザインするスタンスに立てるようになったことであり、毎回楽しみに待っている中学生の姿や御礼の手紙をもらうことで、本校の生徒はこの取組の意義や達成感を味わえていると考えられる。



【床清掃の様子】

中学生の生徒も、当初は雑巾の絞り方や清掃用具の名前を覚えることで精一杯だったが、二年間の取組を通して、窓や床清掃の基本を身に付けることができ、更に、清掃へ興味を示す生徒が増えた。また、中学校卒業後のイメージがもてるようになり、「本校を受検したい」と自ら進路先を選択する生徒や、「なぜ高校に行くのか」と高校に行く意味を考えられるようになった生徒も増えた。

今回の取組を通して、特別支援学級の生徒をはじめ、通常学級の生徒や先生方にも本校について知ってもらうことができ、中高の連携を深めることができた。

(2) 課題・展望

これからも、地域協働活動を通して、生徒達が異年齢の人との関わりで、自ら感じる事、気付くこと、得られること、その過程を経て成長する節目や気付きの場を意図的につくっていきたいと考えている。また、中高の連携を充実させ、連続性のある教育を実践していきたい。

5. その他（参考文献等）

- ・職業学科3校合同研究実践事例集 地域と共に進めるキャリア発達支援【ジアース教育新社】
- ・高等学校における特別支援学校の分校、分教室 全国の実践事例集 23 【ジアース教育新社】

仲間との対話から自己の課題に気付き、自ら改善していく ことで清掃技術を高めていく取組

【学校名：千葉県立特別支援学校市川大野高等学園】

～取組のポイント～

上級生がアドバイザー役になり後輩に清掃の技術を伝えたり、生徒同士でお互いにアドバイスしたりするなど、対話的な活動を通して学び合うことで、清掃の技術を高めていく取組である。対話から新たな気付きを促し、主体的で深い学びへとつなげている。

1. 実践の概要

(1) 対象生徒

メンテナンスサービスコース（以下、本コース）の1年生（1年男子6名女子2名）で、千葉県特別支援学校清掃検定県検定（以下、県検定）選手の選考の基準である「千葉県特別支援学校清掃検定（以下、清掃検定）の目的に理解を示し、清掃検定を希望した生徒のうち、各種目の試技上位者3名」とした。

(2) 教科・領域

専門教科の時間（14単位時間／週）内で実施した。

(3) 目標

標準的な清掃方法を理解して取り組むことができる。

(4) 学習計画

11月下旬（学園祭終了後）から12月までの約59時間内で実施する。

※「校内大掃除単元」と同時進行

2. 実践の内容

- ・県検定の申し込み1か月ほど前から清掃検定の意義やねらい、学ぶことのメリットなどを生徒に話し、校内での練習に入る。
- ・校内の清掃検定の練習は初めに1週間程度、各生徒の適性を見るために行い、そこで各生徒自身がより実力を出し切ることのできる種目を自己選択できるようにしている。
- ・その後に選手を選定し、2週間程度の練習を経た後に県検定へ出場する。
- ・多くの生徒は細かいルールを覚えるとともに、ルールがある理由について、座学や実習を通して学習を進める。
- ・授業の中では、教員の言葉も大切であるが、就職した際と同僚や先輩からの言葉も大切であるという考えの下に、他者評価を取り入れた。
- ・清掃検定の出場締め切り前には校内検定を行う。可能な限り県検定を想定した場を作成し、教員は試技を採点し、生徒は試技者の見学を行う。

3. 工夫点

- ・社会人になった際に、後輩としてどのような態度が良いのか、先輩として相手を思いやった態度とはどのようなものなのかを感じられるようにした。

- ・「アドバイスシート」(右図) を使ってメモにしておき、自分の意見として相手に伝えられるようにした。
- ・より県検定の場面に似通った設定にするために、軽量鉄骨を利用した枠を作成し、毎回同じ大きさに、素早く、少人数でも組み立てられるようにした。

アドバイスシート		
平成29年__月__日		
記入者: _____	試技者: _____	
演技内容: アビリン	フロア清掃	窓清掃
改善点: ここを直すともっと良い。		
_____。		
_____。		
良い点: ナイス、名演技。		
_____。		
_____。		

4. 実践の評価 (成果と課題)

- ・お互いにアドバイスをし合うことで、清掃検定の技量を上げ、他者からの評価を受け入れて試技に生かす練習や相手を思いやったアドバイスができるようになった。
- ・どのようなことを伝えられたらうれしいか、役に立つか、自分ならば言われたときに嫌な気持ちにならないかに気を付けて、前向きなアドバイスや主体的に自分の意見を伝えることができてきた。
- ・上級生も清掃検定を経験していることから、アドバイザー役として、1年生に清掃検定の内容を伝えたり、手本を見せたりする場面があった。
- ・上級生も自分が県検定で失敗した箇所やミスしやすい所、県検定の雰囲気などを主体的に伝えることができた。
- ・近隣病院の出張清掃の際に、学んだ内容を実践できた。また、異なる清掃場所では、使う技術が違うということも実感できた。
- ・本検定を通して、全ての生徒で清掃の質の向上が見られた。
- ・以前は何となく行っていた窓清掃が、理由も含めて考えられるようになったことは大きな変化である。
- ・集中する力や目標に向けて取り組む力が身に付き、主体的に清掃に取り組む姿が見られるようになった。
- ・県検定と同じ大きさや質感の枠で練習できることは、県検定での生徒の緊張や不安を軽減させることに繋がった。

(2) 課題・展望

- ・清掃検定の根幹の理念として、「幼児児童生徒に清掃の楽しさを伝える」ことがあげられる。学習・発達段階に応じた指導方法で清掃検定を伝え、目先の「金賞のために」という、本来の趣旨とは異なることにならないようにしていきたい。
- ・発展的な学習として、障害者技能競技大会や厚生労働省資格であるビルクリーニング技能士への学習を用意し、各生徒が自身の技量に合わせて主体的に取り組めるように学習内容を用意したい。

生徒の自主性と考える力を育成する模擬会社設立の取組

【学校名：千葉県立市原特別支援学校つまい風の丘分校】

～取組のポイント～

会社活動を実施することで、生徒自らが決めた活動をとおして学習意欲と考える力を育成する。教師も社員の一人となって取り組み一緒に作業することで、生徒一人一人の得意な点を伸ばしながら自己肯定感を高めて主体的な活動につなげていく。

1. 実践の概要

(1) 対象生徒

高等部流通サービス科（流通コース）1～3年生24名（各学年8名）

(2) 教科・領域

専門教科「流通・サービス」（週14時間）

(3) 目標

目標	手立て	そのために教師が行うこと
○働くことのすがすがしさ・楽しさを味わい、自己肯定感を高める。	・やり遂げる経験（小さな成功体験）を積み重ね、達成感を味わえるようにする。	・がんばった成果が実感できる活動（トイレ清掃、床のワックスがけなど）を多く設定する。 ・人の役に立ったと実感でき、生徒も教師も本気になれる校外清掃を多く計画・実施する。 ・生徒の欠点を指摘するよりも、「こうするともっと良くなるよ」とのアドバイスを増やす。
○自分から進んで働くことができる。	・自己選択・自己決定の場面を増やす。	・分担決め：教師があらかじめ決めて伝えるよりも、「～したい人は手を挙げて？」と聞く。 ・指示をできるだけ少なくし、「どうしたらいい？」と問いかける。

(4) 学習計画

1学期	2学期			3学期	
<1・2年> 清掃用具の使い方	プロをめざして (校内清掃検定)	文化祭に向けて 調理・販売、 学習発表	会社活動②	会社活動③	体育館 ワックスがけ
<2・3年>会社活動①	3日間のみ				
トイレ清掃（(株)イエローハット創業者鍵山秀三郎氏の清掃方法に倣って）					
校外清掃（通学路・高齢者宅・庭園の除草、公民館・駅のトイレ清掃など）					

2. 実践の内容

本コースの清掃指導は、安全にきれいに早く行える国家検定に則った知識技能を基にしている。それを土台にして、上記の目標達成に向けて、会社活動を導入している。

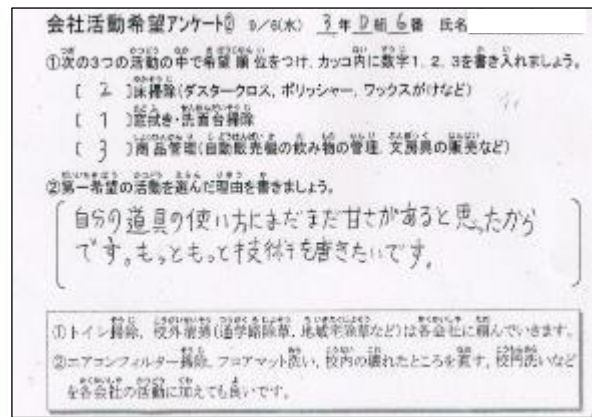
(1) 会社活動とは

自分の行いたいことで仲間を集めて会社を設立する。会社活動の内容を決めるポイントは、楽しくて生産的なこと、学校の役に立つこと。社長は生徒の中から選び、教師も社員の一人として活動する。（岩瀬 2011）

(2) 進め方

ア. 会社をつくる

各学期、各生徒にアンケートを2回ずつ取り、会社を設立。1次アンケートは予備調査で「何を行いたいかな？」を自由に書いてもらう。それをまとめて2次アンケートの選択肢とする。その結果で全生徒をグループ分けする。次に、教師に担当希望を聞き、グループを編成する。各グループは生徒4名と教師1名。



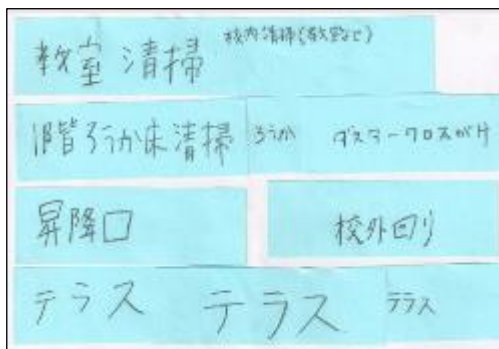
2次アンケートの例

会社ごとに集まり、何を行うか相談する。グループ内の生徒全員の意見を吸い上げるため、各生徒が行いたい事を付せんに書いて発表し合う。次に、KJ法でなかま集めをして、グループの意見をまとめる。その際、自主性の大切さを説く下記の考え方を大切にしている。

「同じことでも、命令されてやれば、かったるく感じる。逆に、自由にやっていると、俄然やる気が出る。どちらがいい結果を生むか想像することはたやすい。」
山本美芽『りんごは赤じゃない』、新潮社、2002、p.68.

ウ. 予定を立て、活動する

各社ごとに、活動期限までにやりとげたいこと（ゴール）を決め、活動予定表を書く。その際、人の役に立つことに気付けるよう「誰の喜びのために行うか？」を全員で確認し、活動予定表に記入しておく。



各生徒が書いた付せんの一部

社名	[]	学年	[]月
1	社員(生徒職員計5名以下)	()	()
2	誰の喜びのために行うか?	()	()
3	何を行うか?	()	()
4	ゴール「2月2日までに()が()になっている」	()	()
5	モットー(学校の行動で、心がけていくこと 例:楽しくなる行事)	()	()
6	活動予定		
日	期	活動内容	
19日	金	1~3	会社活動導入(活動計画、用具購入など)
22日	月	1~4	会社活動①

会社活動の活動予定表

3. 工夫点

- ・教師も社員の一人であり、生徒と同じ目の高さで同じ活動を行う。師弟同行。
- ・生徒が苦手なことを改善するよりも、得意なことを伸ばして自信を持たせる。

4. 実践の評価 (成果と課題)

(1) 成果

- ・自分たちが決めた活動なので、やる気と責任を持って取り組む生徒が多い。
- ・自分が選んだ活動をやり遂げて達成感を味わい、清掃が好きになる生徒が多い。
- ・教師の指示がなくても、足下のゴミに気付いて拾ったり、「～して良いですか？」と教師に聞いて活動したり、自分から進んで働く生徒が増えている。
- ・学期毎に活動グループを変えて様々な生徒・教師と働くことで、協調性が高まる。
- ・縦割りグループの活動で、先輩がすすんで働く姿を見て、後輩達は学んでいる。
- ・自分で考える習慣がつくことで、色々なことに気がつく生徒が増えている。(授業後にみんなの椅子を揃えて入れる、県清掃検定終了後に体育館の床のごみを手で拾うなど。)

(2) 課題・展望

- ・生徒たちは精一杯がんばるので、その日の活動予定が時間よりもかなり早く終わることがある。その際、廊下のモップがけなど新たな活動を追加することが多い。
 - 働いた生徒に、私たちの給料に当たる報酬を与えたい。例えば、目標を達成したら、休憩時間を長くする、レクを行う、石焼き芋を作って食べるなど。
- ・家庭でできる掃除・洗濯などの家事を活動内容に取り入れる。その成果を家庭で発揮することで、保護者に褒められ、自己肯定感を高められるようにしたい。

5. その他 (参考文献等)

- ・岩瀬直樹『「最高のチーム」になる！クラスづくりの極意』農文協、2011.
- ・鍵山 秀三郎『マンガでわかる！「掃除道」心を磨くトイレ掃除』 PHP 研究所 2007

基礎基本技能の習得と身に付けた技能を校外清掃に生かすことで自信や成就感を高める取組

【学校名：千葉市立高等特別支援学校】

 ~取組のポイント~

本校のビルクリーニング班では、清掃検定を活用して全員が清掃の基本技能を習得できるように取り組んでいる。近隣の学校等で校外清掃を実施し、身に付けた技術を多くの人に評価してもらうことで、学習意欲の向上につなげている。小学校での校外清掃では、児童に対し「お掃除講座」を実施し、交流を深めた。

1. 実践の概要

(1) 対象生徒

千葉市立高等特別支援学校 ビルクリーニング班 1～3年生

本校は軽度の知的障害のある生徒が通う高等部単独の特別支援学校である。92名の生徒が6班に分かれて作業学習に取り組んでいる。その中で前期18名、後期19名の生徒がビルクリーニング班に所属し、清掃を通して働く力を身に付けるために学習をしている。校内検定は全員行い、その中から代表として3年生5名、2年生1名の計6名が千葉県特別支援学校清掃検定に出場した。

(2) 教科・領域

作業学習（ビルクリーニング班）

(3) 目標

基礎基本技能を身に付けよう

(4) 学習計画

前期	後期	単元名・学習内容
4月	11月	「基礎基本技能を身に付けよう」 自在ぼうき・テーブル拭き・水モップ・ダスタークロス 自在ぼうき・テーブル拭き校内検定実施
5月 6月	12月 県検定	「学校や地域の窓をきれいにしよう」 窓清掃・窓清掃校内検定実施
7月	1月	「トイレ清掃の方法を身に付けよう」 トイレの日常清掃・定期清掃
9月	2月	「ポリッシャーを使い床をきれいにしよう」 ポリッシャーの正しい使い方・洗剤や剥離剤について
10月	3月	「グループ清掃をしよう」 自分たちで清掃場所や清掃内容を考えて、計画を立てて清掃を実施

校外清掃スタート



2. 実践の内容

(1) 基礎基本技能の習得

ビルクリーニング班では、半期を5つの単元に分けて学習を行う。その中で前半にある2つの単元「基礎基本技能を身に付けよう」「学校や地域の窓をきれいにしよう」で校内検定を活用している。清掃検定マニュアルにある、雑巾の絞り方や自在ぼうきの持ち方などは、ど

の清掃内容でも活用できる基本技能が多く含まれている。そのため、半期の中でも初めの方に校内検定を実施して全員が基本技能を身に付けられるようにしている。その際、ビルクリーニング班の経験のある2・3年生が中心となりマンツーマンで清掃を教えている。退屈になりがちな基礎基本練習の単元で「校内清掃検定で1級獲得」という目標を設定することで、生徒たちがモチベーションを上げて学習に取り組むことができた。

(2) 地域とつながる校外清掃の実施

身に付けた技能を学校内だけではなく、多くの人に評価してもらうために窓清掃を中心に校外清掃を実施している。地域の小中学校や保育所、千葉市内の学校、千葉市教育会館、企業などから依頼を受けて清掃活動を行った。校内検定1級を目指し身に付けた技能を校内だけではなく、様々な現場で発揮していくよい機会となっている。多くの人に見られることで、よい緊張感を持って活動をすることができた。また、多くの人から「ありがとう」の言葉ももらい、人の役に立つ、感謝される喜びを感じられる活動となっている。今年度は41回の校外清掃を実施することができた。

(3) 小学校における「お掃除講座」

校内検定で1級を獲得した生徒の中から代表で6名が県検定に出場する。その6名が自分たちの身に付けた清掃技能をもとに、小学生に清掃を教える「お掃除講座」を行った。地域の小学校に出向き、小学6年生に「テーブル拭き」「自在ぼうきを使った廊下清掃」「窓清掃」の方法を教えた。当日は、雑巾の絞り方や持ち方、手順、ほうきの管理方法など学習した内容を小学生の発達段階に合わせて教えることができた。また、「なぜこの方法がよいのか」と理由も踏まえて教える姿も見られた。お掃除講座後には「6年生のみんなが上手に清掃できるようになって良かった」「掃除の楽しさが伝わったかな」「すごいわかって嬉しかった」と満足げに話す生徒もいた。人に教える活動を通して、自分の技能を認められるとともに成就感を味わうことができた。この後、6年生は教えてもらったことを実践し、さらに1年生に教えに行くというつながりのある活動ができた。



3. 工夫点

検定練習の際には、お互いの良さを認めたりお互いを高め合ったりできるようになってほしいと考え、生徒同士でアドバイスし合いながら学習を進めるようにした。

教師側の技能向上として、まず教師が同じポイントで指導できるようにするために担当教師全員で夏季に行われる「清掃検定講習会」に参加した。また、検定内容にかかわらず清掃技能を高めるために、清掃会社から指導を受ける機会を設けている。

4. 実践の評価（成果と課題）

(1) 成果

清掃検定を通して自分たちの基本技能を身に付ける。そして、技能を発揮して人から認められる経験をする。さらに、自分のできるようになったことを誰かに教える。という流れのある活動をすることができた。1級や金賞を取ることで得る達成感だけではなく、人から認められる喜びを感じることや人の役に立つ経験をすることができた。

(2) 課題・展望

今後も県検定において、結果を残すことだけにこだわるのではなく、清掃を通して頑張りが認められる経験や「自分にもできる」「人の役に立った」という自己有用感や成就感の味わえる活動をしていきたい。

身近な素材を題材にして情報活用能力の育成を目指す教科 「情報」の取組

【学校名：千葉県立特別支援学校市川大野高等学園】

～取組のポイント～

親しみのある素材を使うことで学習の意欲を高め、基本的な情報機器操作の習得を図りながら生活に必要な情報活用能力を身に付けていくことを目指した。さらに、授業で学んだことを生かしてパソコン入力検定に挑戦するなどし、主体的に取り組む態度の育成につなげている。

1. 実践の概要

(1) 対象生徒

高等部 1、2 年生（各学年 4 学科 1 2 クラス）

(2) 教科・領域

教科「情報」の授業（週 1 回の授業）

(3) 目標

- ① コンピュータなどの情報機器操作の習得を図り、生活に必要な情報を安全・適切に活用する能力や態度を育てる。
- ② 1 年生でワード、2 年生でエクセル・インターネット、3 年生で画像の編集・パワーポイント、著作権などを中心に学習する。

(4) 学習計画（年間指導計画）

	1 学年		2 学年	
目標	○生活の中で情報やコンピュータなどの情報機器が果たしている役割を知り、それらの活用に関心をもつ。 ○情報の取扱いに関する決まりやマナーを理解し、それらを守って学習する。	授業 予定 回数	○各種のソフトウェアの操作に慣れる。 ○情報機器を利用した情報の収集処理及び発信の方法が分かる。	授業 予定 回数
4 月	「オリエンテーション」 「携帯電話」（対策の必要性和方法） 「身の回りの情報システム」	2	「情報の学習について オリエンテーション」 「昨年度の復習」	2
5 月	「情報モラルとセキュリティー」	4	・パソコン操作の基本 ・文字入力 ・ファイルを開く、保存する ・プロフィールシート	3
6 月	「Word」の基礎 ・ローマ字入力 ・センタリング ・字体の変更 ・ページレイアウト	2	「Excel」の基本 ・基本操作 ・カレンダー作り 「Excel」の活用	3
7 月	「Word」の活用 ・実用文書作成	2	・売り上げ ・一覧表の活用 ・操作活用	2
9 月		2	「情報モラルとセキュリティー」 （ウイルスソフト） ・インターネットの使い方	2
10 月	「Word」の活用 ・パソコン入力検定 （検定に向けた取り組み）	1	「インターネット」 ・Google Map ・Yahoo トラベル ・電車検索 ・興味のある会社、職業を調べ、Word でレポートを作成する	2
11 月	・文字入力練習（速度部門） ・文書レイアウト練習	2		1
12 月	（文書作成部門）	2	「Word」の活用 ・パソコン入力検定（検定に向けた取り組み）	3

1月	「Word」の活用 ・チラシの作成 ・ページ設定 ・イラストコピー	2	「インターネット」 ・修学旅行調べ	2
2月	「情報モラルとセキュリティー」 ・SNSを使った他者との望ましい関わり方等	4		1
3月	「1年間の学習のまとめ」	2	「1年間の学習のまとめ」	3

2. 実践の内容

< 1年生 >

- ・ワードによる文字入力の導入として、「校歌」や「生徒心得」を使い入力練習を行った。
- ・インターンシップで使用する「自己紹介カード」の文字入力を行った。
- ・ワードの基本的な機能は、書体・色・大きさの変更、レイアウト（左揃え、センタリング、右揃え）のプリントを作成し、行った。

< 1、2年生 >

- ・昨年度の問題（速度部門1～4級、文書作成部門1～2級）を活用し、授業で行った。
- ・文書作成部門に関しては、本校独自の問題を作成して行った。

3. 工夫点

< 1年生 >

- ・親しみのある「校歌」や「生徒心得」を使い、文字入力を行った。
- ・ワードの基本機能を学習できるプリントを作成し、練習した。
- ・3級、2級から練習を行い、検定前に生徒と相談し、受検級を決めた。

< 2年生 >

- ・昨年度の問題（速度部門、文章作成部門）を活用して練習した。
- ・文書作成は2級と1級しかなかったので、形式は同様にして、文字数を増やしたり、難しい漢字を入れたりしたオリジナルの問題を作成した。
- ・3級、2級、1級からの練習や昨年度の結果を参考に、生徒と相談して、受検級を決めた。

4. 実践の評価（成果と課題）

（1）成果

- ・授業を重ねるごとに、文字入力速度が速くなっていく生徒が多く、入力文字数が増えた。
- ・1年生96名のうち、3級に3名、2級に9名が合格した。
2年生92名は、1年次に3級19名、2級8名、1級6名の合格者がおり、2年生になって、3級5名、2級5名、1級4名が合格した
- ・パソコン入力検定の後に、ワードを活用して「年賀状」「チラシ」を作成したが、引き続き意欲的に授業に取り組む生徒が多かった。画像のコピーや貼り付けもほとんどの生徒ができるようになり、「年賀状」「チラシ」をイラストと文字の配置を考えながら完成することができた。

（2）課題・展望

- ・平成30年度より、1年生のみでなく、他学年も受検できるようにした。より上級合格を目指して、学習に励めるように来年度も引き続き検定を行っていきたいと考えている。なお、生徒の実態に応じて、4級以降の受検も考えていく。
- ・1級合格生徒に関しては、本校独自の受検問題を作成し、「1段・2段」といった名称で賞状を出し、意識を高めたい。また、学校外のパソコン入力検定を推奨していくようにする。

パソコン入力検定を通してパソコンへの興味とチャレンジ意欲を育てるスキルアップ型の授業の取組

【学校名：千葉県立袖ヶ浦特別支援学校】

～取組のポイント～

キーボードを打ちやすくすることで入力速度の向上につなげるなど、生徒の障害の状況に応じた補助具や環境設定を工夫した。タイピングの技術向上を生徒自身が実感することで、パソコン操作への興味と学習への意欲が高まった。

1. 実践の概要

(1) 対象生徒

中学部、高等部に在籍している生徒のうち希望者

(2) 教科・領域

- ・ 中学部は技術科で、高等部は情報の授業でパソコン入力の学習を実施。
- ・ 希望者には、「千葉県特別支援学校キャリア教育推進協議会」が主催するパソコン入力検定の受検に向けた学習を実施。

(3) 目標

- ・ パソコンを使った文字入力に、意欲的に取り組むことができる。
- ・ パソコンを使うことに、より興味を持つことができる。
- ・ パソコン入力検定に向け、入力能力の向上と文書作成の仕方を覚えることができる。

(4) 学習計画

時期	内容
9月下旬	検定についてのガイダンスを実施。 検定に向けて授業の中で練習に取り組み始める。
10月中旬	検定級を決定し、検定申込用紙を提出する。
11月6日	検定実施期間開始 ※授業時間や放課後の時間を活用して検定を実施。
12月1日	検定実施期間終了
12月上旬	検定合格発表、検定証の授与

2. 実践の内容

情報の授業時間などを利用して、タイピングや文章作成の練習に取り組んだ。時間を計りながら、本番と同様の環境での練習に取り組んだ（写真①）。また、今年度用の練習問題だけでなく、昨年度の検定問題を利用しながら練習を積み重ね、受検する級を決めた。



写真①

3. 工夫点

デスクトップとノートパソコンのキーボードの打ちやすさを比較したり、キーボードの位置を変えたりしながら、入力しやすい環境を探った。デスクトップのキーボードはキーが出っ張っており、キーの間の溝が大きくタイピングがしにくい様子であったが、ノートパソコンのキーボードは、溝がほとんどないため、タイピングがしやすく、入力速度が上がっていた。

(写真②、③)

遠くのキーを打つことが困難な生徒は、棒を使ってタイピングに取り組んだ。持ち手部分が長くなると、扱う際に力が必要になるため、軽い木の棒で作成した。(写真④)

車いすのテーブルにキーボードを置くと、問題用紙を置くスペースが無くなってしまい、机に置いてある問題用紙が見にくかったり、パソコンの操作がしにくかったりする。そのような場合には、書見台を使用し、無理なく問題を見ながらパソコン操作ができるようにした。



写真②「デスクトップのキーボード」



写真③「ノートパソコンのキーボード」



写真④「遠くのキーを打つために作成した補助具」
(右側の棒の部分を持ち、左側の丸い突起部分でキーを打って使用する。)

4. 実践の評価（成果と課題）

(1) 成果

- ・授業時間いっぱいまでタイピングや文書作成の練習をするなど、熱心に学習に取り組むことができた。
- ・練習を重ねるにつれ、タイピングの速度が速くなった生徒がいた。
- ・集中して検定に臨むことができていた。
- ・一般の検定を受けることが難しく、検定を受けたことがない生徒が多いが、この検定には多くの生徒が参加することができ、良い経験になっている。

(2) 課題・展望

生徒の実態に合わせた補助具や環境設定の工夫を継続して行い、検定で身に付けた技術を日々の学習に生かすことができるように授業を工夫する。

スキルアップを図ることで余暇活動だけでなくパソコンとの関りを広げていく部活動「パソコン部」の取組

【学校名：千葉県立八千代特別支援学校】

～取組のポイント～

パソコン部の活動にパソコン入力検定の取組を加えることで、活動の目的が明確になり、主体的に取り組むようになった。また、生徒一人一人の実態に応じた練習問題や生活に身近な内容を取り上げた練習問題を活用することで、パソコンへの親しみと活動への意欲が向上した。

1. 実践の概要

(1) 対象生徒

高等部パソコン部部員

(2) 教科・領域

特別活動（部活動）

(3) 目標

パソコン入力検定の取り組みを通して、パソコンへの親しみを高め、主体的に学習に取り組むことができる。

(4) 学習計画

- 4月初旬～ 部活動開始
- 4月中旬～ タイピング、入力練習開始
- 10月～ パソコン入力検定練習
- 12月 パソコン入力検定

2. 実践の内容

今回は、パソコン入力検定をパソコン部に所属する生徒を対象に実施した。パソコン部ではこれまで、パソコン検索を中心に余暇につながる学習として活動を実施してきた。12月のパソコン入力検定受検に向けての活動を中心に据え、活動に取り組んだ。

部活動としての取り組みであるため、生徒個々の実態に大きく差が見られた。そこで、検定の練習問題にすぐに取り組むのではなく、自己紹介のワークシートに入力したり、身近なものを取り上げたりしながら、実態把握をし、文字入力から活動を開始した。入力練習では、初めは、興味を持って活動に取り組めるように、給食の献立を取り上げ、入力練習を行った。単語から練習を始め、徐々に入力文字を増やし、昔話や童話などを資料とし練習に取り組んだ。文字入力に慣れてきたところで、生徒個々の実態を把握し、それぞれの力にあった検定問題を提示し、10月頃から検定問題に取り組むようにした。

検定に向けた活動の導入時に、検定を受検するかどうかを先ず生徒に投げかけ、自分で選び、判断できるようにした。初めは、抵抗のあった生徒も、身近な題材を使った入力練習を行う中で、自信が付き、検定に対して前向きな言葉が聞かれるようになり、最終的にはパソコン部全員が受

検することとなった。

受検級については、問題を見せ、各自で何級を受けたいかを選べるようにした。受検級を自分で決定できるまで、繰り返し検定問題に取り組み、毎回、教師と結果を振り返る場面を設け、次回はどの級に取り組むかを教師と相談しながら、自分で練習計画を考え、受検級を決定できるようにした。

3. 工夫点

- ・受検の有無や検定級など、教師と相談しながら、自己決定をしながら進められるようにした。
- ・検定に向けて、練習問題から取りかかるのではなく、給食の献立や童話といった身近な題材から練習を行った。
- ・入力練習後には必ず、教師がその様子を振り返り、できていた点や次に頑張る点、検定級について話し合う場面を設けた。

4. 実践の評価（成果と課題）

（1）成果

部活動としては、これまでは余暇活動が中心であった。初めは、これまでの「好きなことができる時間」という認識から、検定に向けた取り組みに抵抗感のある生徒もいた。活動の流れを固定することで、自分の好きなこともできるという活動の流れが理解できてくると、前向きに検定問題に取り組む姿が見られるようになった。それに合わせて、初めは離席や退室が多く見られていたが、



入力練習に自信が持てるようになり、「〇級合格したい」という気持ちの高まりに合わせ、部活動自体に参加できる時間を延ばすことができた。そして、検定後には、「検定に合格できた」という喜びから、進んで入力の練習

にも取り組めるようになり、余暇としてだけではないパソコンとの関わりを広げることができた。ローマ字が未学習であった生徒では、初めての事柄に対する強い抵抗感もあり、ローマ字入力に対して拒否的な気持ちが強く見られた。部活動の場面では、簡単な問題から練習を始め、ローマ字表を見ながら入力ができるようにした。練習問題に取り組む中で、徐々に自信もつき、夏休み明けには、「ローマ字マスターしてきました」と自分から報告をしてくるなど、意欲的にローマ字を使ったパソコン入力に取り組めるようになった。そして、検定に合格してからは、「パソコンが得意」という自信につながり、パソコン作業がある際には「僕がやります」と、初めての活動であっても自主的に活動に参加する姿を見ることができた。

今回の取り組みでは、受検級を自分で選び決定することを大切に取り組んできた。毎時間、教師が取り組みの様子を伝え、一緒に振り返りを行った。振り返り際には、取り組んだ結果をプリントアウトし、どこを間違えていたか、あと何点足りないかなど、1つ1つ教師と一緒に具体的に振り返り、次はどうするかを確認していった。その中で、「次は、〇級をやります」と、取り組む級を自分で選ぶことができるようになった。また、この取り組みの中で、「読めない漢字があったから」などと、自分の状況を振り返り、教師に言葉で伝えることができるようになった。そして、受検申込時には、全員が自分で受検する級を決め、検定に挑むことができた。

また、年度当初は、インターネット検索時に毎回教師を呼び、「〇〇と入力してください。」と依頼していた生徒も、検定の入力練習を経て、自分で入力して検索をしようとするようになった。検定練習に取り組む中で、教師に依頼してではなく、自分で入力し検索できることで、自分の興味のあるものをスムーズに検索できるようになり、パソコン部の活動をより楽しみ、意欲的に活動する様子を見ることができた。

(2) 課題・展望

本校では部活動の中での取り組みであったため、時間的な制約が多くあった。特に、2級以上の文書入力に関しては、指導を行うことができなかった。今後も引き続き検定を行っていく上で、文書入力に対する指導をいかに行っていくかが課題である。

また、パソコン入力検定での取り組みで身につけた力を部活動以外で活用する場面を設けることができなかった。今後は、検定で終わるのではなく、販売会の散らし作りを請け負うなど、活用できる場を設け、社会の中で生かすことができるような取り組みも見据えていきたい。

パソコン入力検定については、生徒の実態に合わせ、受検する級を選択できることで、幅広い生徒に対して検定を実施することができる。また、検定の受検という明確な目標を持つことで、自己について振り返ったり、結果を自信につなげたりと、多くの生徒の成長を感じることができた。様々な児童生徒も対象とできる検定であるため、検定への取り組みを部活動だけでなく、いかに広げていくかが課題であるが、今後も継続して検定に向けた活動にパソコン部では取り組み、多くの生徒がパソコンに親しむことができるよう支援していきたい。

生徒同士で協働する活動をとおして一人一人の学習意欲を高めながらキャリア発達を促す取組

【学校名：千葉県立夷隅特別支援学校】

～取組のポイント～

生徒同士がペアになって学習活動に取り組み、教え合いや協力を行いながら活動をやり遂げる協働を大切にしている。協働をとおして、個々のスキルアップを図りながら、生徒同士の関わりや相互理解といった内面の育ちを促すなど、キャリア発達支援につなげている。

1. 実践の概要

(1) 対象生徒

高等部2年 生徒 6名

(2) 教科・領域

職業科

(3) 目標

生徒同士でペアを組み、協働する活動や振り返りをもとに、よりよく活動に取り組んでいる自分を育むことができる。

(4) 学習計画

- ・教師の説明を聞きながら、個人で活動に取り組む。・・・3時間
- ・ペアになって、何をどのようにやるか相談しながら、活動に取り組む。・・・5時間
- ・一人で時間いっぱい活動に取り組む。・・・3時間

2. 実践の内容

6名の生徒は、過去に3回、産業現場等における実習（校内実習を含む）を体験してきた。各事業所において、集中力や持続力、適性などを養うことを大きな目的として実施してきたが、担当者から指導を受け、行動に移すことが多かった。このように生徒達は、教師や担当者の指導や支援を受けることが多く、受け身になっているのが現状である。

そこで、学級の「職業」の時間を使い、生徒同士の主体性を引き出せる授業を検討した。本学習では、生徒同士で協働することの大切さ、友達の頑張りや苦手に気付き、ともに高め合うといった相乗効果を狙いとする。生徒同士で教えあったり、称賛しあったりすることで、お互いを認め合い、個々のキャリア発達を願いたい。

活動は、どの子も分かりやすく、簡単な作業である「計量」や「アルミ缶つぶし」、「割り箸の袋詰め」、そして、誰もが一人でできる活動ではないが、興味をもち、得意とする生徒もいる「パソコン入力」に取り組む。どの活動についても、最初は教師から説明を受け、個々に取り組んだあと、生徒同士で見合っ、より正確に行うための方法や、効率的な手順をアドバイスし合う。

学習は、それぞれの4つの活動について、生徒同士がペアになって進めていく。学習を続けることで、生徒同士の関わりから活動の流れや作業工程を理解し、自らが時間いっぱい活動することができるようになってほしいと願った。



一緒に活動するペアを伝える。



友だちと一緒に協働することで相手を意識し、相乗効果がうまれた。



3. 工夫点

ペアでの取り組みを大切に、生徒同士が教え合い、協力し合いながら活動に取り組むことができるような場面設定を中心に授業を計画した。最初に教師が支援してベースを作り、活動に慣れたところでペアの生徒に教え方や伝え方を引き継ぎ、交代することで、生徒同士が指さしで教えたり、言葉をかけたりしながら活動に取り組むことができた。学習を進めるに当たっては、4つの活動をそれぞれ2セットずつ用意したことで、生徒の待ち時間もなく、各活動にスムーズに移行して取り組むことができた。

4. 実践の評価（成果と課題）

（1）成果

工程が分かりやすい作業内容であったため、活動への見通しがもちやすく、どの生徒も自分から積極的に活動する姿が見られた。教師の指示を受けて活動する機会の多い生徒達にとっても、生徒同士がペアになることで、お互いで活動している様子を見たり、活動を分担し協力し合いながら進めたりすることで、自分の担当する活動に対して意欲的に取り組む姿が見られた。出来栄やスピード、その他の事を生徒同士で評価し合うことで、より一層意欲的に学習する姿が見られた。ペアという他者を意識する機会を設けたことで、活動中に友達の様子を見て励ましたり、賞賛したりする姿が多く見られた。教える生徒、教わる生徒、共に満足感を味わえる学習となった。学習の終わりの感想発表では、自分が頑張ったことだけでなく、ペアの友達に向けての感想発表も行うようにした。「やさしかった」「丁寧に教えてくれた」など、友達から称賛されるとうれしそうに喜ぶ姿が見られたり、友達はこんなことができるんだという他者理解につながったりと、互いの良さを認め合う良い機会となった。

パソコン入力練習では、難しいながらも全員のモチベーションが高まり、積極的に何度もチャレンジする姿が見られた。生徒の多くがパソコンに興味をもっているため、パソコン入力練習については、どの生徒も集中して活動に取り組むことができていた。

（2）課題・展望

多くの学習においては、教師主導の指導や支援となっている。もちろん、基礎基本を的確に生徒に伝えることは教師の役割でもあり不可欠といえる。しかし、同時に生徒同士の関わりを大切にする事の必要性も改めて感じる事ができた。

職業自立、社会自立に向けては、個々のスキルアップを進めることはもちろんであるが、「誰のために」「何のために」という、働くということについての本質的な理解も必要となる。その本質を理解することで、仕事に対する充実感や意欲が生まれ、仕事の定着にも通じるものとする。自分だけでなく、相手のことを思う気持ちを育てることは、キャリア発達の視点からも、大切で不可欠なことと考える。特別支援学校という小さな集団ではあるが、お互いを認め合うこと、学級の一員として自分は必要な存在であるということを知り合うことは、他の教科でも具体化できることでもある。

協働する活動をもとに、友だちとの関わり、相互理解といった内面の育ちを大切に、生徒の個に応じたねらいや手立てを明確にした主体的な学びを展開し、キャリア発達を支援していきたい。

平成31年3月

千葉県教育委員会

千葉県特別支援学校キャリア教育推進協議会